

越後小出戊辰戦役における戦死者祭祀

今 井 昭 彦

目 次

- 1、はじめに
- 2、会津軍の出陣と三国峠の戦い
- 3、小出島・四日町の攻防戦
- 4、戦死者祭祀の展開
- 5、むすび

1、はじめに

ここにいう越後小出^{こいで}戊辰戦役とは、鳥羽・伏見の戦いに始まる一連の戊辰戦役のなかで、越後における緒戦となった戦いである。時に慶応4年閏4月27日のことであつたが、厳密にはこれより3日前の24日に越後と上州の国境である^{みくに}三国峠において、会津藩小出陣屋から出陣した会津藩兵と上州前橋藩兵らの新政府軍とが交戦している。また、同26日には幕府軍衝鋒隊・会津藩兵が長州藩兵らと小千谷の芋坂・雪峠（現小千谷市）で戦火を交えており、これから翌27日の小出島（現北魚沼郡小出町）と四日町（前同）での初期会津戦争ともいわれる本題の戦闘に繋がるのである（なお会津では幕府軍・会津軍を東軍と呼び、いわゆる官軍を西軍と呼んでいるので、以下これに倣うことにする）¹⁾。会津藩兵と薩長らの新政府軍が衝突したこの戦いによる戦死

者は、西軍が16名、東軍が14名と²⁾、戦死者の数からすれば極めて小規模ないくさではあったが、約1ヶ月後の越後戊辰戦役の最大の山場となる長岡城攻防戦の前哨戦ともいえるべき戦闘であり(会津藩の友軍となる長岡藩の参戦、つまり奥羽越列藩同盟への加盟は同年5月4日であり、また越後での会津藩戦死者の総計は姓名が判明できる者だけで341名であった)、さらに戊辰戦役の勝敗を決定づけた同年8～9月の会津鶴ヶ城攻防戦を占うような意味深い戦いでもあった。とくに初期会津戦争といわれる所以は、現在の小出町の大部分が会津藩領であったため、地元の農民の多くが会津藩側に立って戦ったからである³⁾。

この戦いで西軍戦死者は政府軍戦死者として手厚く埋葬されたであろうことは推察できるが、同じ国事殉難者でありながら反政府軍である戦没会津藩兵の扱いはどうなったのであろうか。約半年後の会津戊辰戦役では、「賊軍」である東軍戦死者3000の遺体は腐敗するにまかされたまま山野に放置され、西軍は半年近くその埋葬を許可しなかったが⁴⁾、西軍は小出においても同様な扱いをしたのであろうか。本稿の意図は、まさにこの点を明らかにしようとするものである。

2、会津軍の出陣と三国峠の戦い

小出島が初めて会津藩預り領となったのは(会津藩の石高は23万石であったが実収は約70万石といわれる)、享保9年で、その時の会津藩預り領は魚沼郡内の与板藩領(17ヶ村)・長岡藩領(20ヶ村)を除いた残りの村々で、石高は7万石に達し、小千谷・六日町(現南魚沼郡六日町)・十日町(現十日町市)に会津藩陣屋が置かれた。さらに文久元年、陸奥・安房両国の会津藩領5万石が幕府直轄地となった替地として、越後の蒲原・岩船・三島・魚沼の4郡で6万石が会津本領となり、蒲原郡酒屋村(現新潟市)に会津本陣が置かれ、小出島に出張陣屋が設置されて三島・魚沼両郡の新領をも管治することになると、小出島陣屋詰めの藩役人と小出島地元民との結びつきは一層深められていった。小出島陣屋詰め役人は、元治元年の頃は2名定員であ

ったが、慶応2年9月1日から代官が任命され、役人数は代官以下4名が常駐する代官所（酒屋本陣の分陣所）となった。こうしたなかで慶応4年2月15日、弱冠30歳の会津藩士町野源之助（320石、明治以後は主水と改名）が小出島奉行として着任した⁵⁾。小出島の地は六十里越や八十里越をもって会津に通じる要衝で、会津藩は封土3万石・303村・1万7000戸を支配していた。しかし一説には、その実収は15万石ともいわれ、会津藩にとっては軍事的・経済的な面からも重要な拠点であり、また西軍にとっても戦略上必ず攻略しなければならない土地であった⁶⁾。そこで本題の小出島・四日町の戦いを語る前に、既述の三国峠での戦いから触れておきたいと思う。そこでは町野奉行の実弟町野久吉（17歳）が戦死しており、小出島陣屋所属の会津藩士のなかに初めての戦死者が出ているからである。

町野奉行が小出島に着任したことで地元は臨戦体制に入り、慶応4年3月には領内の村々から郷兵・村兵が徴兵された。郷兵とは庄屋を意味し、村兵とはその下に従う百姓たちである。組頭や百姓代など、一応村役人に名を連ねる者たちも村兵とされ、村兵は民兵と呼ばれることもあった。当時は上越国境でもいわゆる「世直し一揆」が発生しており、政情は極めて不安定であった。当初の農民の徴兵はこの一揆に備えるためのものであった⁷⁾。

こうしたなかで慶応4年4月2日、江戸城は開城し、西軍の東北・越後方面への進軍が本格化する。小出島にも江戸を出発した東山道鎮撫軍（西軍）の一隊が上州から三国峠に侵攻してくるという風聞が伝わり、同年閏4月9日、町野奉行は郷兵・村兵の出動を発令すると同時に、同日には早くも小出島陣屋の手兵70余名と小千谷陣屋の会津藩士井深宅右衛門（550石）の手兵30余名、計100余名を率いて三国峠へ向けて出陣している。また翌10日には後続部隊200余名も三国峠へ向かって出発している。三国峠とは越後浅貝宿（現南魚沼郡湯沢町）から上州永井宿（現群馬県利根郡新治村）までの2里半の区間で、浅貝から1里ほどが国境であったが、町野隊は11日には三国峠に到着した⁸⁾。

町野隊は上州への下り口にあたる大般若塚（現新治村）に布陣して三国峠の守りについたが、西軍は暫く攻め入る気配もなかったので、町野奉行は150

名ほどの兵を同地に残して、他の部隊は一旦小出島に帰還した。町野自身はそのまま残留したようであるが、同22日には西軍が上州須川宿（現新治村）まで来襲したというので、小出島陣屋では翌23日に再び兵を三国峠へ向けて出兵させた。そして24日に六日町まで進軍したところ、三国峠での東軍の敗戦を知り、やむなく小出島に引き返した⁹⁾。

三国峠に駐留していた東軍が西軍と一戦を交えたのは24日であった。西軍は前橋・高崎藩兵ら1200余名が永井宿に陣を構え、三方から東軍の布陣する大般若塚に進撃した。両軍相交えて激戦となったが、東軍150名は西軍の圧倒的な兵力を前にして抗しきれず、越後方面へ退却した¹⁰⁾。この戦闘で既述の東軍副大将町野久吉が戦死を遂げている。その奮戦ぶりについては諸説あるが、地元永井宿らの古老の口碑によれば次のようである¹¹⁾。

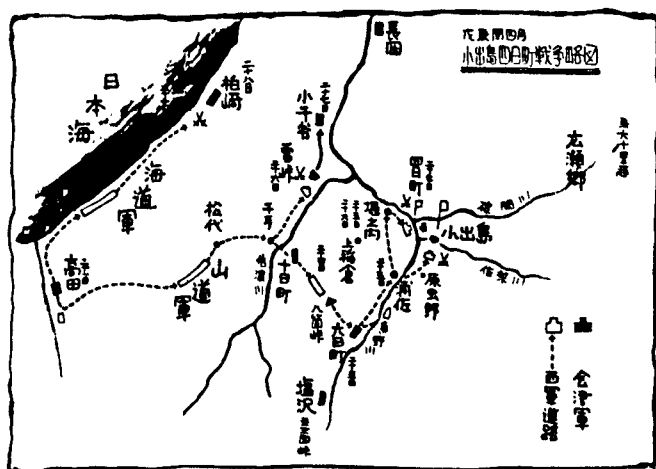
「三国峠に会津軍が駐屯していた時、久吉は味方が打ち出す大砲の砲煙に姿を隠して、時に長槍で敵を悩ましたが、或る朝、霧で四囲の暗黒であるのを幸いとして、長槍を提げて獅子奮迅の勢いで飛び出し、当るを幸いに突き伏せて、18名を血祭りにあげた。これを見た敵兵は大いに辟易し、左右に道を開けてしまったので、後方部の砲兵陣地を飛び越え、遂に最後方の総督目がけて突進した折、狼狽した敵兵はこれに驚いて、周囲から一斉射撃をした為、遂に膝をついて打ち倒れた。その時、久吉は『この首を渡すから出て来い』と叫んだが、誰一人として近寄る者がいない。その中で、勇気ある者が三人、寝首をかかんとして近寄ったが、三名共槍先に突き倒されてしまったので、敵兵総掛りで久吉を打ち取ってしまった」

会津藩には伝統的に槍の名手が多く、町野家もそのひとつであったが、町野奉行は蛤御門の変で一番槍を行い、弟の久吉もそれに倣ったことであつたと思われる。しかし近代火器の前では槍の名手もなす術はなかった。戊辰戦役における東西両軍の兵器の性能の差を象徴する一戦であつたといえる。久吉の首は1週間、永井地内で晒されたが、時は閏4月（陽暦では6月）で首の腐敗が激しく蛆が湧く始末であつたので、地元民の手によって同地の駒利山に埋葬された。また久吉とともに4名の東軍戦死者も西軍に突入したが、このうち好川滝之助（21歳）と湯浅六弥（同）の2名の会津藩士も戦死して

いる。彼らも久吉と同様に永井宿で晒し首になったという¹²⁾。一方、西軍戦死者（その数は不詳）は直ちに各藩地へ収容された¹³⁾。

3、小出島・四日町の攻防戦

三国峠が破られると、東軍は西軍の追撃を遅らせるために浅貝宿や二居宿（現湯沢町）を焼き払って退却した。三国峠からの上州諸藩兵らと、十日町方面からの薩摩・長州・尾州・松代などの西軍各藩兵は六日町付近で合流した。そこで六日町と塩沢（現南魚沼郡塩沢町）にひとたび分宿した上州軍は、小出島の攻撃を薩長らの越後征討軍に委ねて引き返した。すでに閏4月21日に高田（現上越市）を出発した越後征討軍は二手に分かれ、主力の海道軍は山県有朋（長州）・黒田清隆（薩摩）の両参謀が同行して東軍桑名藩兵が拠る柏崎（現柏崎市）に向かい、もう一方の山道軍が軍監岩村精一郎（土佐）に率いられて小出島・小千谷方面へ進軍して来たのであった。小出島・四日町攻撃のための西軍兵力は数百名（諸説あり）であったといわれている¹⁴⁾。



『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』（小出町戊辰百二十年記念事業実行委員会、1988年、29頁）より転載

地図 小出島四日町戦争略図

三国峠から退却した東軍が小出島に到着したのは25日のことで、消息不明となっていた町野奉行も同日には小出島に姿を現し、防戦体制に入った。地元は避難する人々で大混乱となり、会津藩士の家族たちも24日の晩は中島村（現北魚沼郡広神村）の万行寺（小出島陣屋の菩提寺であった）に一泊し、翌日には六十里越から会津へと向かっている。小千谷陣屋からは会津藩士井深宅右衛門と同じく山内大学に率いられた援軍180余名が小出島に駆けつけ、東軍は200余名の勢力となった。さらに会津藩領の各村から動員した郷兵・村兵と、小出島陣屋の最寄りの村から集めた15歳～60歳までの屈強な人夫で陣固めをして西軍を迎え撃つことになった¹⁵⁾。

軍勢の配置は、井深隊が小出島陣屋と小出島地域（佐梨川岸・魚野川岸）を固め、町野隊と山内隊が四日町地域（堀之内と川西に面した魚野川の東岸）に布陣した。また、小出島の南方面から佐梨川を渡って入る柳原口と、小出島の北の入口にあたる日渡の二ヶ所に大砲を据え、佐梨川や魚野川の川岸と四日町の川岸に仮砲台を築いた。さらに藤権現山頂や佐梨からの浦町入口、本町の松原仁左衛門家の前、大出のはば（崖）などに「小出島備組」と大書した大旗を立てて見張りをつけた。他方、十日町方面から展開して来た西軍700余名は25日の夕刻、小出島から2里上流の浦佐（現南魚沼郡大和町）に到着し、普光寺（真言宗）に本陣を置いた。そして翌26日には尾張藩兵を主力とした別動隊が小出島下流の堀之内（現北魚沼郡堀之内町）に進軍して、三方から小出島・四日町を攻撃する体制についた¹⁶⁾。

閏4月27日の未明、東軍の打ち上げた烽の爆音が戦闘開始の合図となった。西軍別動隊が魚野川を渡って四日町に攻め込み、西軍本隊も小出島へ侵攻を開始した。西軍の『太政官日誌』には当時の戦闘の様子が次のように記されている¹⁷⁾。

「二十七日、大イニ雨フル、官軍小出嶋ヲ攻撃ス、小出嶋ノ賊ハ会津其他ノ精鋭ニシテ、其数多カラズト雖モ頗屈強ナリ、敵、駅ノ河岸南西ニ巨材ヲ並列セルアリ、恰モ好堅壘タリ、賊兵ニ抛リテ劇シク発砲ス、時ニ薩・長一部ノ兵ハ、魚野川ノ上流ヲ渡リテ進ム、賊ノ斥候ニ逢フテ之ヲ遂斥シ、直チニ小出嶋ニ向フ、然レドモ、佐梨川前ニ横ハリ容易ク進入スルコトヲ

得ズ、賊兵砲丸ヲ發スコト雨ノ如シ、薩・長ノ兵算ヲ乱シテ倒ル、其状極メテ慘ナリ、之ヨリ先官軍壯士数人ヲ遣ハシ、佐梨川ノ上流ヨリ駅ノ東ニ至リ、火ヲ人家ニ放タシム、炎エン天ニ漲ル、堀之内ヨリ進ミタル奇兵ハ、初メ、河ヲ隔テ砲戦セシガ、賊兵小出嶋ノ急ナルヲ顧ミ、遂ニ民舎ニ火シテ逃ル、乃チ河ヲ渡リ四日町村ニ至ル、此ノ時、薩・長ノ兵ハ既ニ小出嶋ノ駅中ニ突入ス、賊兵抗戦シ、白刃相接シ、叫呼奮戦ス、忽チニシテ、鮮血濺々河ヲ為シ、死屍累々山ヲ為ス」

合戦が始まると、陣地固めに使役されていた小出島近隣の村人たちは、蜘蛛の子が散る如くに戦場から逃げ出したと記録されている。戦いは砲撃戦の後、激しい白兵戦が展開された。そして西軍が東軍の砲台を占拠したことで、兵力と火器に優る西軍の勝利は確定した。本格的な戦闘時間は午前7時頃から9時頃までの2時間余りであったという。東軍は西軍の放火によって燃え上がる小出島・四日町を後にして、広瀬谷（現広神村）方面へ敗走した。町野・井深・山内らの各将も撤退を余儀なくされた¹⁸⁾。

4、戦死者祭祀の展開

この27日の戦闘で小出島の全戸数（295戸）の45%が、四日町はその全戸数（100余戸）の35%がそれぞれ焼失したが、落命した地元民は2名のみで¹⁹⁾、既述したように西軍戦死者は16名、東軍戦死者は14名であったとされる。しかし、西軍の信州松代藩や同飯山藩ら近隣諸国の死傷者は直ちに郷国に搬送されており、後に国元で戦病死した藩兵もいたであろうが、その数は不明である。そして薩長ら遠国の国元へ搬送できない戦死者は、西軍の命により沿道の村人によって戸板やモロッコに乗せられ、西軍本陣のあった浦佐の普光寺に収容された。その数が16名（薩長各8名）であった。彼らの位牌は同寺住職の小野方賢宝和尚によって作られ、その遺体は同寺毘沙門堂西裏の山腹に手厚く埋葬された。墓域の広さは351坪で、16基の墓碑が建立された²⁰⁾。

一方、味方の戦死者や重傷者などを顧みる暇もなく敗走した東軍の屍は、地元の人々も西軍を憚ってか、誰ひとりとして手を触れる者もなく、焼け爛

れたものもあり、犬に喰い散らされるものもあるという有様であった。こうした惨状を見かねて、小出島正円寺（曹洞宗、現小出町小出島）の隠居僧で



写真1 現在の正円寺

あった大龍和尚（和尚は合戦の間、寺の堂宇に端座して動かなかったという）は、「埋骨は僧侶の職」であり、「死ねば皆仏である」として、西軍にその埋葬の許可を申し出た。軍議によって戦後の小出島は信州松代藩が、四日町は同飯山藩が管理していたが、松代藩将蟻川賢之助・同竹花兵馬はこの申し出に対して、手輕の処置を条件に直ちに許可したという。薩長とは異なり、松代藩や飯山藩は越後に近い隣国であり、元来、小出島との親交も深かったようで、会津藩に対してもかなり同情的であったのではないかと推測できる。和尚は自費で小出島の大塚墓地内（現小出町小出島）の火葬場の一隅に東軍戦死者6～7名を一穴に埋葬し、読経をして供養した。埋葬を認可した西軍の蟻川・竹花の両将も埋葬地検分を理由に参会焼香したという²¹⁾。

翌明治2年の1周忌には東軍戦死者10名の戒名を刻んだ墓石（台座からの高さ75センチ）が、大龍和尚によって大塚の遺体埋葬地に建立された（ただ

し碑側には「慶応四年
大龍和尚建之」とあ
る)。埋葬者のほかに
西軍によって刎首等に
された東軍兵士を加え
た計10名の霊を弔うた
めの墓碑であった²²⁾。
たとえばそのうちのひ
とりで、腿を撃ち抜か
れる重傷を負って青島
村(現小出町青島)に
潜伏していた井深隊の
樋口常作(20歳)の最
期については次のよう
にある²³⁾。

「村中残らず調印を
取りて之を秘密に
す、小出町より橘某
医毎日通って治療す
れ共、急所にや、全



写真2 東軍戦死者10名の戒名を刻んだ墓石

治覚束無し、爰に至り、樋口氏、身の行末を慮りてにや、庄屋太郎左衛門
に密談して、切腹を相果さん事を計る、重立一同と共に協議して、場所を
選定す、星文四郎の墓なる地獄覚悟と唱うる処に決定し、夜中、爰に負い
出す、石碑を積んで楯とし、東向に座して位置を定め、重立は手分けして
大いに準備す、夜中に事を果たせんとすれども応ぜず、日の出を待ちて日
輪を礼拝して生害を遂ぐ、夫より死骸は筵(マヤ)に包みて字水沢、太郎右衛門の
所有畑に一時仮埋葬す、此の年、孟羅盆会に至り、所持しいたる金五円を
林泉庵へ茶湯料として納む」

また、山内隊の須佐留四郎(42歳)あるいは小沼雄八(27歳)と思われる人



写真3 現在の大家墓地

物については、

「四日町では、小千谷からの援軍のうち山之内隊の兵二人が、西軍の捕虜となってしまった。(中略)堀之内の本陣の普賢寺へ連行された会津兵は、その近くの太神宮の社務所の柱に縛りつけられた。ところがこの二人、間もなく逃げだした。日時は不明だが、二人の逃亡を手助けした者がいて、縄を切るか解くかして逃したのである。(中略)しかしふたたび捕まった会津兵の方は、許すも許さないもない。不屈き千万であるとばかりに、小千谷へ向かう前に魚野川の川べりに引き出され斬られたのである。もと堀之内町役場の裏に当たる川べりであったという」

と記録されている²⁴⁾。とくに樋口(自害は5月1日)には林泉庵(曹洞宗)の方丈よりその年(慶応4年)の盂蘭盆会に「鐵應義膽居士」という法名が与えられ、重立たちの尽力によってその法名を刻んだ墓石(台座からの高さ55センチ)も建立された²⁵⁾。

戊辰3回忌にあたる明治3年1月、政府は「戊辰戦役朝敵の巨魁」であっ

た会津藩士の謹慎を解き、会津藩は実質的な流刑地である陸奥斗南藩3万石（実収は7000石。藩主は旧会津藩主松平容保かたもりの実子容大かたはるで藩庁は現青森県むつ市に置かれた）に移封となった。会津松平家は辛うじて存続することになったのであるが、この頃より小出に縁のあった旧会津藩士が小出の地を訪れるようになり、翌4年5月9日、かつての奉行町野主水ら4名が来村し、正円寺に滞留して東軍戦死者の法要を営んでいる。これは会津人によ



写真4 樋口常作の墓碑

る小出における戦役後初の東軍戦死者の供養ではないかと思われるが、まだ世間を憚っての法要ではあったものの、町野らが12日に帰路につくまでに地元の人々は連夜酒宴を開いて一行を歓待したという²⁶⁾。

下って明治7年4月27日の命日には、東軍戦死者の7回忌法要が正円寺で開催された。施主は大龍和尚と推察できる²⁷⁾。暫くはタブーとされていた「賊軍」である東軍戦死者の慰霊活動が、この7回忌あたりを期として漸く公に開始される兆しが見え始める。そして2年後の同9年8月18日、政府は各府県宛に「幕軍戦死者の祭祀許可」について下記のような興味深い通達（太政官達書第百八号）を発した²⁸⁾。

「戊辰・己巳きしの際、一時朝旨を誤り、王師に抵抗せし者、降伏謝罪の道相立ち、それぞれ寛典の御処分仰せ出され候、各地に於て戦没の者は別段御沙汰もこれなきに付き、その親族ども祭祀等憚り居り候者これある趣に相聞こえ、愍然の事に候間、前条寛大の御趣意に候得ば、死者親族朋友より祭祀等執行儀は御構いこれなく候条、地方官に於て御趣意とくと諭告すべく、この旨心得のため相達し候事」

戊辰戦役からほぼ10年の歳月を経て、「王師に抵抗した」東軍戦死者の祭祀は政府から公式に許可されたのであった。一方の西軍戦死者は国家によってすでに明治2年6月創建の東京招魂社に祀られており、同社は10年後の明治12年6月に靖国神社（別格官幣社）と改称しているから、両者の扱いにいかに大きな隔たりがあったかを知ることができる。この通達によって全国の東軍戦死者の慰霊活動が活性化されたことは容易に想像できるが、すでに慰霊活動を開始していた小出でも、同9年9月13日には大龍和尚ほか重立16名によって無縁仏施餓鬼供養が開催され、戦死者の確認がなされた。既述の10名に加えて町野久吉ら4名の戦死者にも法号が与えられ、供養の対象とされた²⁹⁾。

明治13年4月27日の13回忌法要では東軍のみならず西軍戦死者の法要も正円寺にて同時に実施しているが、以後は17回忌（旧暦4月27日を新暦に換算した明治17年5月22日）、20年霊祭（旧暦閏4月27日を新暦に換算した明治20年6月18日）、23回忌（明治23年6月14日）、27回忌（明治27年5月31日）、33回忌（明治33年5月25日）と、回忌ごとにいずれも正円寺で東軍戦死者のみの供養を実施している。この間、東軍戦死者の祭祀に対して中心的役割を演じてきた正円寺中興の大龍和尚は明治15年8月に63歳で遷化しているため、その篤志は地元の後継者たちによって継承されたことになった。同寺の山門入口には明治25年3月に「大龍和尚之碑」（永平琢宗布衲書。高さ6尺余）が建立された。揮毫者の琢宗とはかつての同寺19世で、自費をもって同碑を建立したという³⁰⁾。

33回忌を経た明治35年9月、旧小出島陣屋跡地（現小出町小出島）に創設された小出島小学校の校庭の一隅に小出戊辰戦役を記念する「懷舊碑」（高さ260

センチ余)が旧会津藩関係者によって建立された。旧斗南藩主松平容大(陸軍騎兵少尉正五位勲六等子爵)の篆額で、旧会津藩士であった南摩綱紀(高等師範学校教授正六位勲六等)の撰書によるその碑文(明治29年7月成文)の一部は下記の通りである³¹⁾。

「(前略)当時官軍に抗する者は 今みな一視同仁の沢に浴し ともに太平の臣民となる 而るに死者独りその恩を蒙り得ず なんぞその不幸なると 然るに 蘭校の生徒この碑を讀



写真5 「大龍和尚之碑」

み 而してその事を記し仰ぎては旧侯の沢を懐い俯しては死者の霊を祭る 即ち迷魂もまた応に永く帰する所あるべし 嗚呼諸氏建碑の志厚きというべし そもそも学校の人に教うるの道は忠孝をもって本となす 今これを挙ぐる 教育に関するに蓋し勸少に非ざるなり」(原漢文)

会津藩も孝明天皇への「忠義」のために戦ったのであり、決して「賊軍」などではないという無念の叫びが伝わってくるようであるが、翌36年6月にはこの碑の脇に三国峠の合戦以来の東軍戦死者(町野久吉以下14名)の姓名を刻んだ石碑(高さ約90センチ)も建立され、同月に両碑の除幕式が挙行された³²⁾。日本にとって本格的な対外戦争であった日露戦役を目前にして旧

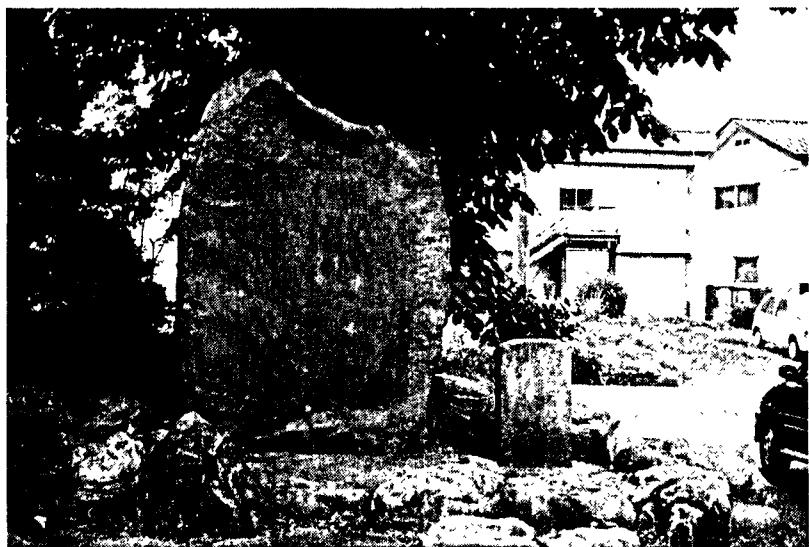


写真6 「懷舊碑」

会津藩士の「忠魂」が小学生や村民の耳目をひくことになった。

大正期に入ると、大正6年は戊辰50年にあたり、小出では同年6月16日(旧暦の4月27日に相当)に戊辰戦役戦死者50年祭を開催している。小出島区長から町内の各組長宛に出された『案内状』には次のようにある³³⁾。

「(前略) 戊辰戦死者五十年祭、午前八時、煙火合図ニ懷旧碑前ニ於テ神式執行、十時煙火合図ニ正円寺ニ於テ佛式相営ミ候間、有志参拝相成候様、且、当夜軒燈籠ヲ点シ、追弔ノ意ヲ表セラレ候様、併セテ組内一般へ御通知之程御依頼申上度候」

当時の戦いを再現するかのように煙火を合図に、午前中は「懷舊碑」の前で神式による慰霊祭が、午後は正円寺にて仏式による祭典が執行され、夜は戦死者の霊を弔う燈籠の明かりで町内が包まれたようである。まさに町を挙げての祭典であったことが窺われる。

昭和になると、昭和3年は戊辰の年にあたったので60年祭の年とされたが、翌4年8月17日には旧会津藩主家の海軍少将子爵松平保男と町野主水(大正

12年に85歳で他界)の子息である陸軍大佐町野武馬が小出町を訪問し、一泊している。目的は東軍戦死者の墓参であったが、地元ではこれに先立ち、大塚墓地内の東軍戦死者墓地の整備を行った。つまり昭和4年6月、町長櫻井庄平の主唱により小出島区の有志が大塚墓地の一画に敷地を定め、「戊辰戦死者墓」(台座からの高さ257センチ)を建立した。その脇には大龍和尚が建立した最初の10名の墓と青島村の重立たちが建てた既述の樋口常作の墓碑が移転されて建立された。現在見ることができる墓域はこうして成った。そして松平子爵一行が来町した当日は、日中は町内に「日の丸」を掲揚し、夜間は球燈で飾って町民は敬意を表したという³⁴⁾。一方、同年秋には、町野武

馬は叔父の久吉が晒し首にされた永井宿を訪れ、地元の人々の協力によって久吉の遺骨らしきものを発掘している。掘り出された遺骨の量は一体分よりも多かったといわれているが、その遺骨は翌年3月23日の春彼岸、白虎隊士の眠る会津若松の飯盛山(現会津若松市一箕町八幡)に改葬され、同年4月10日には小出町の大塚墓地にも分骨されて、正円寺で法会が営まれた³⁵⁾。

太平洋戦争後は戊辰90年祭(昭和32年)を経た昭和35年6月吉



写真7 「戊辰戦死者墓」

日、久吉が埋葬されたといわれる三国峠の駒利山（現群馬県利根郡新治村永井）に「会津藩士白虎隊 町野久吉墓」（石井光次郎書）が町野武馬翁有縁の有志によって建立され、その整地作業中に偶然、ほぼ完全な頭蓋骨も発見された。おそらく久吉の可能性は高いであろうが、詳細は不明である³⁶⁾。

昭和63年は戊辰120年にあたり、また戊辰の年でもあったので、小出町では記念事業を開催した。戊辰百二十年記念実行委員会が発足し、その趣意書には、

「小出の地で戦死した会津藩士及び地元被災者の冥福を祈るとともに、永年その供養に努めてこられた小出町の先人の遺徳を偲び、さらに我々の郷土小出町が経てきた明治維新の歴史に思いをいたして、ここに戊辰百二十年祭を厳（マツマツ）かり執り行うものである」

とある³⁷⁾。同年6月11～12日には町の文化財室で戊辰戦役関係資料展示会が開催され、11日には会津若松市在住の郷土史家宮崎十三八の『戊辰の小出と会津』と題する講演会が北部公民館で開かれた。また『戊辰小出島戦争百二十年周年記念誌』が記念事業委員会によって編集発行されるとともに、町内



写真8 「会津藩士白虎隊 町野久吉墓」

の全世帯には戊辰戦役について簡単に説明したパンフレットが配布された。一方、12日の午前10時30分からは「懷舊碑」前で神式による慰霊祭が、同11時30分からは正円寺にて仏式による慰霊祭が行われ、同12時30分には大塚墓地の「戊辰戦死者墓」へ墓参している。慰霊祭には松平家当主の松平保定を初め120名が出席し、浦島屋にて直会・時齋が開かれている。さらに四日町村谷地町の覚張常五郎宅で自刃した望月武四郎（23歳）と推定される井深隊の会津藩士（覚張家の仏壇に所持金5両入りの巾着を残していた）が障子に書き残した辞世「筒音に鳴く音やすめしほととぎす会津に告げよ武夫の死を」と、これに弔意を表し東軍戦死者の埋葬についても便宜を図った西軍松代藩将の蟻川賢之助の歌「ほととぎす魚野川辺の夏嵐永久に伝えよ波騒の声」の歌碑が、「懷舊碑」の近くに建立された（歌碑の建設および周辺整備費は約110万円）。この記念事業における総支出は240万円で、会津人にとっても小出の人々にとっても大きな節目の行事となった³⁸⁾。

小出町は明治29年8月に町制が施行されて以来100年が経過し、平成8年10月27日には町制施行百周年記念式典が予定されている。これに先立ち、記念事



写真9 「會津藩烈士之碑」

業の一環として同年6月22日、会津藩士殉難者を慰霊する石碑「會津藩烈士之碑」（會津松平十三代松平保定書）が四日町（現小出町四日町）の諏訪神社境内に建立された。当時、町野奉行らは出陣前に同社で戦勝祈願を行い、



写真10 現在の諏訪神社

また戦場ともなった場所であった。同碑は、小出町出身で「東京舟陵会」（新潟県立小千谷高等学校同窓会）会長池田恒雄（新潟県ベースボール・マガジン社会長）の尽力によって成ったもので、碑背に刻まれた池田による「建立のころ」には次のようにある³⁹⁾。

「作家の司馬遼太郎は幕末期の会津藩とその人々を『人間秩序を磨き上げた光沢の美しさ』と称賛していますが、会津藩と小出とは、一七〇〇年代、享保時代から一つの文化ルートとして密接につながっていました。戊辰の役の時も、小出の奉行は典型的な会津藩士で、薩・長・土軍の悲惨極まる小出における殺戮と放火に対して、身をもって抵抗しました。このため多くの会津藩士が小出の地で非命に斃れたのです。あれから、星霜百二十年の歳月は過ぎ去りましたが、小出に生まれ育った者として、今日の小出の

町の繁栄を思う時、志を後世に問うと、死をもって小出の地を守り殉じた会津藩烈士の魂を慰めずにはおれません。戊辰戦争殉難者の皆様、どうか安らかにねむりください」

町の天然記念物に指定されている樺の巨木が戊辰当時を物語るかのように鬱蒼と生い茂る同社境内には、同村の近代日本における対外戦争戦死者を祀る「忠魂碑」（陸軍大将福島安正書。大正4年9月建設）も建立されており、大塚墓地の墓石や「懷舊碑」とともに戊辰戦役からほぼ130年の時を越えて、戦没会津藩士の慰霊碑がさらにひとつ小出の地に完成したのであった。

5、むすび

この初期会津戦争における東軍戦死者の祭祀は、当初推測していたような会津戊辰戦役における「賊軍」としての取り扱いとは多少異なっていた。もっともその戦死者の数の大差は比肩できるものではなく、小出の戦いはあくまでも「初期」の戦いであった。薩長の会津藩への憎悪も戊辰戦役の展開とともに助長されていったものと考えられるが、戦後の小出の管理が薩長ではなく同地と馴染みのある近隣諸藩（信州松代藩・同飯山藩）によってなされたことで、会津藩に対する「武士の情け」が働いたとみるのは妥当であろう。西軍藩将が初期の段階で東軍戦死者の埋葬地に参会焼香しているというのは、後の事例からしても例外的な特筆すべきことであった⁴⁰⁾。そしてさらに何といても大龍和尚や重立たち地元民の会津藩士に対する「厚誼」が東軍戦死者の慰霊活動を支えた原動力となっていたのであった。

現在、大塚墓地の「戊辰戦死者墓」前では立正佼成会（越後川口教会小出支部）によって毎年、供養が行われている。命日にあたる4月27日はまだ雪が残っているため、お盆過ぎの8月27日を祭日としている。同会の壮年・青年両部が中心となり、同会関係者20名ほどと、小出町長や教育委員会（文化財）関係者など計約30名が集まり、同会の祭式に従って早朝の6時から開催される。式は約1時間半で終了し、御神酒や供物が配られる。同会による供養は戊辰110年を過ぎた昭和56年から自主的な判断によって開始され（同会

では土地因縁の供養は大切であると指導されている)、それまでは毎年、町主催の法要が執り行われていた⁴¹⁾。また正円寺では東軍戦死者の位牌に対しては日常的に花や線香を絶やさないようにしているという⁴²⁾。さらに諏訪神社境内の新たな慰霊碑も、東軍戦死者の慰霊施設としての役割を担うことになった。

一方の西軍戦死者の祭祀については殆ど触れることができなかったが、浦佐普光寺の西軍墓地（浦佐戊辰薩長戦士の墓）には、日清・日露戦役以降の對外戦争による地元出身戦死者の墓碑も建立され、現在は招魂社と呼ばれている墓域の中央に木柱の「慰霊碑」が建立されている（社殿は創建されていない）。その管理は地元の人々による浦佐戊辰回顧顕彰会（現会員は42名）



写真11 普光寺の招魂社（浦佐戊辰薩長戦士の墓）

によってなされているが、同会では戊辰120年祭を記念して墓域内に平成元年7月、案内板『浦佐戊辰薩長戦士の墓』を建て、翌2年4月には桜（そめい吉野）の苗木を植樹している。しかし西軍戦死者の供養はお盆の8月13日に同寺住職によって施餓鬼供養といったかたちで実施されるのみで、遺族関

係者による墓参は皆無に等しいという⁴³⁾。

今後は長岡や小千谷の戦いにおける戦死者祭祀のありようについても日を改めて報告したいと考えている。

〈註〉

- 1) 『第10回会津と越後を語る会記念講演録・奥羽越列藩同盟と長岡藩兵の戦い』会津と越後を語る会小出大会実行委員会、1996年、57頁。『戊辰百二十年記念講演会・戊辰の小出と会津』戊辰百二十年記念事業実行委員会、1989年、頁欠。中島明『幕藩制解体期の民衆運動』校倉書房、1993年、483頁。
- 2) 『小出町歴史資料集・第六集（明治維新編）』小出町教育委員会、1988年、52～54頁。
- 3) 前掲『戊辰の小出と会津』、頁欠。会津武家屋敷文化財室編『となりの侍たち——越後と会津——』博物館会津武家屋敷、1994年、36頁。
- 4) 詳細については森岡清美・今井昭彦「国事殉難戦没者、とくに反政府軍戦死者の慰霊実態（調査報告）」（『成城文藝』第102号、成城大学文芸学部、1982年）を参照されたい。
- 5) 前掲『小出町歴史資料集』、105頁。前掲『戊辰の小出と会津』、46～48頁。
- 6) 小千谷市史編修委員会『小千谷市史・本編下巻』新潟県小千谷市、1967年、27頁。磯部定治『魚沼の明治維新』恒文社、1991年、14頁。
- 7) 前掲『小出町歴史資料集』、14～15頁。磯部、前掲書、15頁。
- 8) 前掲『小出町歴史資料集』、15頁。磯部、前掲書、24頁。
- 9) 前掲『小出町歴史資料集』、16頁。磯部、前掲書、24頁。なお、19日には三国峠の会津陣内で不祥事が起きている。それは「町野奉行の家来栗村惣蔵が、川井村大黒屋啓助（小出郷元井口惣兵衛の代理として三国へ出陣）を、ささいの事から切り殺した」（前掲『小出町歴史資料集』、16頁）事件で、その場に居合わせた兵士（渡辺惣照）の談として次のように記録されている。「川井大黒屋の弟と栗村惣蔵の争いには、私も其の場に居合わせました。ほんの些細な事からで、惣蔵が小づかを大黒屋の横腹に刺したもので、黒血が流れ出た有様を目のあたり見たのですが、大黒屋は遂に死んでしま

いました。町野奉行は軍中の規律仮借なり難しとて、手づから栗原の首を刎ねました。首を刎ねます形は、小児の時に折々聞かされたと同じでした。荒筵に坐らせて、側の手桶に水を盛り、奉行は刀を水で湿らせ、粟村に合掌せしめて、充分の覚悟をなさしめ、念佛を三編唱えさせ、三編目の念佛が終わるやスバリと首を刎ねました。首は三尺も先へ落ちて、二・三度まばたきをしました」(前掲『小出町歴史資料集』、116頁)。

- 10) 案内板『戊辰戦と町野久吉少年』(群馬県利根郡新治村永井の駒利山に建立)。
- 11) 前掲『小出町歴史資料集』、118～119頁。
- 12) 前掲『小出町歴史資料集』、119頁。磯部、前掲書、33頁。前掲案内板『戊辰戦と町野久吉少年』。久吉の死に関しては次のようにある。「久吉に一斉射撃した者の中に、永井村の狐師広吉という者があり、昭和三年四月死去したが、病床にある時、常に『久吉が来る怖ろしい、怖ろしい』と絶叫し、当時の戦いで久吉の武者振りが怖ろしかった余り、死に瀕し乍らも追懐古していたという」(前掲『小出町歴史資料集』、119頁)。また久吉の「首より下の胴・四肢は官兵及び村びとが争って肉をそぎ取って食べたという。その理由は全く英雄崇拜の迷信からで、斯くの如き勇者の肉を喰う時は、角力がつよくなり、腕力が増し、健康な子孫が生まれるということからであって、其の肉には酸味があったので、今なお、永井村では人の肉は酸味のものであると言ひ伝えられている」(前掲『小出町歴史資料集』、119頁)。
- 13) ただ、「谷底へ突き落された吉井藩士吉田善吉政明の死体のみは行方不明である為、収容するに由なく今日三国峠の中腹大般若なりに、大般若塚と相対して墓が設けられ、木柵が廻されている」(前掲『小出町歴史資料集』、119～120頁)という。
- 14) 前掲『小出町歴史資料集』、16頁。『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』戊辰百二十年記念事業実行委員会、1988年、27～28頁。磯部、前掲書、44頁。
- 15) 前掲『小出町歴史資料集』、23頁、34頁、98頁。磯部、前掲書、41頁。
- 16) 前掲『小出町歴史資料集』、23頁。
- 17) 前掲『小出町歴史資料集』、32頁。
- 18) 前掲『小出町歴史資料集』、23頁、35頁。この戦いには井深宅右衛門の長男

梶之助（15歳）が初陣している。後に白虎隊士として鶴ヶ城に籠城するが、「柳原口の銃撃戦に参加、本町四ツ角附近で味方の山崎尚三郎と接戦中の敵兵一人を狙撃して倒した後の明治学院大学の名譽総理井深梶之助翁の回顧談の筆記は戦闘状況がよく伝えられて貴重である。三国峠で戦死した十七歳の町野久吉とともに会津少年兵の魁として戊辰戦史に光彩を残した出色の存在というべきである」（前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、39頁）。

- 19) 前掲『小出町歴史資料集』、41頁。地元民の死者は「小出島の小島半左衛門の第九兵衛と、四日町の百姓利兵衛の妻女の二人だけ」（前掲『小出町歴史資料集』、35頁）と記録されている。
- 20) 前掲『小出町歴史資料集』、42頁。穴沢吉太郎『大和の風土記』大和町役場、1969年、183頁。案内板『浦佐戊辰薩長戦士の墓』（浦佐普光寺の西軍戦死者墓域内に建立）。
- 21) 前掲『小出町歴史資料集』、52～56頁、63頁、122頁。前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、45～46頁。磯部、前掲書、90頁。大龍和尚は越後長岡に生まれ、安政5年（1858）に正円寺（林泉庵末寺）17世住職に就任したが、文久4年（1864）に45歳で隠居している。戊辰戦役当時の同寺住職は観山善量であった（前掲『小出町歴史資料集』、121頁）。
- 22) 前掲『小出町歴史資料集』、103頁。前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、47頁。
- 23) 前掲『小出町歴史資料集』、57～58頁。
- 24) 磯部、前掲書、85～87頁。前掲『小出町歴史資料集』、55～56頁。
- 25) 前掲『小出町歴史資料集』、56頁、103頁。
- 26) 森岡・今井、前掲論文、9頁。前掲『小出町歴史資料集』、113頁。主水はすでに明治2年に小出の地を訪れ、隣村中島村の万行寺へ立ち寄り、四日町の諏訪神社に金1両を寄進したりしているという（磯部、前掲書、178頁）。また明治4年の際も万行寺に立ち寄り、弟久吉を初めとした戦死者の回向に感謝しているが、「その時、会津落城直前の九月七日、大沼郡勝方村の山中で自刃した家族五人の法名を持参して、永世供養を依頼していった

と伝えられている。源之助の家族の自刃については、鶴ヶ城攻防戦の決戦が始まる前に、老母から妻子にいたるまで、源之助自身の手で手討ちにしてい、果てさせたという一説もある」（磯部、前掲書、178～179頁）。他方、小出の人々が会津藩に対して特別の情誼を抱いていたことは次の記述からも窺える。「会津鶴ヶ城が開城（明治元年・九・二二）降伏した事を、十月十日に伝え聞いた小島清次は『誠に残念なり、領処の者は一同歎察いたしける』と、その日記に記し」（前掲『小出町歴史資料集』、112頁）、また小出島で戦死した佐藤右衛門の子息源太郎が桂屋を訪ねて来た時、重立たちは合計金五両の寄金を募って源太郎に贈っている（前掲『小出町歴史資料集』、113頁）。

- 27) 前掲『小出町歴史資料集』、98～99頁。前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、61頁。
- 28) 前掲『小出町歴史資料集』、99頁。
- 29) 前掲『小出町歴史資料集』、59頁、98頁。
- 30) 前掲『小出町歴史資料集』、99～101頁、120頁。前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、61頁。
- 31) 『第10回会津と越後を語る会』小出町教育委員会、1995年、15～19頁。
- 32) 前掲『第10回会津と越後を語る会』、15頁。東軍戦死者の数については、「従来連年供養してきた十人に、町野久吉をはじめ、三国峠の戦死者を加えて十三、四名と推定していたが、最終の調査では十五名となり、建設当事者は困惑した」（前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、50頁）とあり、今後の調査で戦死者数は増える可能性もあろう。
- 33) 前掲『小出町歴史資料集』、101頁。
- 34) 前掲『小出町歴史資料集』、102頁。前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、51頁。前掲『第10回会津と越後を語る会』、22頁。町野主水は東軍戦死者の弔霊活動を目的として会津若松に大正2年9月に発足した会津弔霊義会の初代会長に就任しているが（森岡・今井、前掲論文、12頁）、主水の葬儀に関しては奇談が残されている。「大正十二年六月に、田中稲荷の前で奇妙な出来事があった。死んだ父親の遺体を荒筵で包んで、それを引摺っ

てゆくという奇妙な葬列の行列で、道行く若松市民を驚かせた。喪主としてそんな奇行をしたのは、当時満州で張作霖の顧問をしていた町野武馬だった。八十五歳で死んだ父親（源之助重安）の遺言で、自宅のあった北小路町から田中稲荷前を通り融通寺へ野辺送りをしたのだった。町野主水は（中略）戦後味方の戦死者の遺体が放棄されたままのときには悲憤の涙を流し、改葬方を何度も陳情した。その甲斐あって漸く明治二年の春になって阿弥陀寺と長命寺に改葬方が許可されたものの、千二百八十数人の遺体は筵に包み、俵に詰めて運び、荒筵を敷いただけで埋葬するほかなかった。あの時の悲憤が忘れられず、斗南にゆくことも強硬に反対して故郷に踏み止まった頑固一徹の老人は、自分もあの時と同じように荒筵包みの葬送をせよと息子に遺言したものであろうが、（中略）それを北小路で取替えたのは、この通りが維新当時は裏通りで、賊軍の戦死者の遺体を阿弥陀寺に運ぶ道順だった故でもあろう。町野武馬が父親同様悲憤の涙を流して軍部と絶縁するのは、この直後の昭和三年に張作霖が関東軍に暗殺される満州某重大事件以後のことである」（宮崎十三八『会津地名・人名散歩』歴史春秋社、1991年、57～58頁）。

- 35) 前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、52～53頁。磯部、前掲書、33頁。
- 36) 前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、52頁、61頁。
- 37) 前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、63頁。
- 38) 前掲『戊辰小出島戦争百二十周年記念誌』、64～65頁。前掲『第10回会津と越後を語る会』、20頁。前掲『戊辰の小出と会津』、63～64頁。
- 39) 『越南タイムズ』第2370号（1996年7月4日）および現地調査による。
- 40) 日本の歴史においては、敵味方を問わずに戦死者を祀る慣習があったことはしばしば指摘されているが、「日本においては中世以後、戦争で勝利をえた武将は、戦後かならずといっていぐらい、敵味方戦死者のための大施餓鬼会を催し、敵味方供養碑を建てている。たとえば、一四一八年、上杉憲基は、上杉禅秀の乱に死没した敵味方の一切の人畜が、浄土に往生することを祈って、藤沢遊行寺に応永戦死供養碑をたて、また一五九九年島津義弘が、朝鮮の役において戦死した日鮮両将士のために、高野山に石碑を

たてて、その冥福を祈ったことは、その適例とされている。そしてそれは、従来仏教において、怨敵と味方を同視する怨親平等の精神の流露で、博愛精神の表現であるとされている」(圭室諦成『葬式仏教』大法輪閣、1986年、199頁)とあり、また「歴史時代の日本の戦争は、多く同胞相討つ内乱であった。したがって異民族との攻伐が戦乱の中核となった他の国々とは、かなり事情を異にしている。そこでは戦敗国の異民族に対し、どのような残虐な仕打ちをしようと、いささかの罪悪感ものこらない。しかしわが国のような同胞の打ち合いに終始する内乱では、戦勝側にも、後味の悪さがのこる。その罪悪感にさいなまれながらも、自らの行為を正当化するため、多くの武将や当事者は慰霊の供養塔を建てたり、盛大な回向の法会をもよおすことに力を注いでいたのである」(桜井徳太郎『靈魂観の系譜』講談社学術文庫、1995年、81～82頁)とある。

- 41) この辺の事情については、立正佼成会越後川口教会小出支部の小林克次氏(小出町在住)のご教示による。氏は越後長岡藩士の子孫であって、東軍戦死者に対しては特別な感慨をもたれているという。
- 42) 正円寺ご内儀の星則子氏のご教示による。
- 43) 西軍戦死者の祭祀については、浦佐戊辰回顧顕彰会の関静男氏(大和町在住)のご教示による。関氏は普光寺檀家総代でもあるが、氏によれば西軍戦死者の遺骨は大正時代に普光寺の墓地から小千谷の船岡山西軍墓地(現小千谷市船岡)に分骨されたという。また前述の小林氏によれば、立正佼成会同小千谷支部では小千谷での東軍戦死者とともに船岡山の西軍戦死者の供養も合同で実施しているという。

付記) 本稿は平成8年度埼玉県長期研修教員(1年間。研修先は成城大学民俗学研究所)としての研究成果の一部である。本稿執筆にあたっては小出町教育委員会副参事兼社会教育係長・八海昭夫、立正佼成会越後川口教会小出支部・小林克次、正円寺ご内儀・星則子、浦佐戊辰回顧顕彰会・関静男の各氏に大変お世話になった。また民俗学研究所の伊藤幹治、松崎憲三の両先生ならびに事務局の方々と、拙稿発表の機会を与えて下さった本誌編

集委員会の方々にもお世話になった。さらに私の学部時代からの恩師である森岡清美先生（現淑徳大学大学院特任教授）からも私の研究テーマ全般にわたってご指導をいただいた。関係諸氏に対して心からお礼を申し上げたい（1996・7・25脱稿、10・17改稿）。